

マジカル図書館

森際 眞知子（大学教授）

図書館には、多様な役割がある。学校の図書館は勉強、クラブや自治会などの調べ物をするために必要である。が、高校時代の私にとっての図書館は、何よりもまず静寂が保障される空間であった。昔の図書館の入り口付近には「静かに」のような掲示があり、内部でのおしゃべりは厳禁。私にとっては、図書館は何よりも友人や教職員と離れ、一人になれる場、正確には、本と私だけの場所であった。そこには近年のラウングコモンズといったスペースは想像すらされていなかった。

高校時代の図書館。それは、よそ行きの言い方をすれば「これから社会に出ようとする若者や大学に進もうとする若者の興味関心をどのように受け止めてくれる空間」だ。自分をどのようにも発展させてくれる多種多様な本が用意されている所なのである。私には、それがマジカルな空間だった。ここは手に取った本を介して見も知らぬ国を訪れたり、遙か遠い過去の世界に飛び立ったり、思いつくままの冒険ができるツールを手に入れられるマジカルな世界だったのだ。

本というもののこのような関わり方、私の場合、それは次のように始まった。小さい頃、極めて落ち着きのない子どもだった私を、母は何かしようといういろんな稽古事をさせた。彼女の努力むなしくどれ一つ身につかなかつたのだが、そんな私が唯一無理をせずに楽しめたのが読書である。本を手に入れた私は、そこに自分の興味関心に応えてくれる宝庫を見出し、一つの冒険ごとにさらに想像力が刺激され他の興味関心が湧き、瞬く間に母の期待以上に静かになった。学校では引き続き走り回っていたものの、帰宅後は本に埋没したのである。

しくしていた。だが、図書館の魅力は私を捉えて放さなかった。図書館での遊学はついに私を研究者の道へと導いた。

大学は、学部で英文学を学び、卒業論ではロレンス・ダレルの『アレクサンドリア・カルテット』について論じた。大学院では、歴史に転向し、現代日本から遠い古代エジプトの軍事と外交を研究することとした。物理的に行くことが不可能な時代や場所を求めて遊んだ図書館での経験は研究対象を選ぶときにも力があつたものと見える。

日本ではこの分野の研究職に就くのは至難の業である。幸い、瀬木学園の大学、短期大学をはじめ、多くの方々のご理解と支援を得て、研究を続けることができた。短期大学では「オリエンタリズム」、愛知みずほ大学では「文明の歴史」など、専門に関わる授業を担当し、古代エジプト史を教える幸運に恵まれた。古代エジプト史は、現代の日本人にとっていろいろな意味で遠い世界を扱うので、よりよい教育のためにも、私自身が広い視野でものを考え、わかりやすく話をするのが求められた。いわば旅行記の語り部である。異なったものを寛く受け入れ、できるだけ多くの学生のみなさんと分かちあいたいという思いが通じたのか、「異文化論」「生活文化論」「共生文化論」等の科目も担当することができた。こうして、研究生活経験のあるハワイを舞台に多文化共生について語り、「生活文化論」や「人間論」では現代エジプトのほとんどを占めるムスリムの生活文化について、学生とその遠くで近い世界を共に学び、楽しんでいる。

瀬木学園図書館には学園の高校生、短大生、大学生、院生、教職員が、今日も各種情報を求めて訪れる。それは、レポート作成など、実用目的のための訪問であることが多いだろう。しかし、ぜひ、そこにとどまらず、無数の扉を開けるこのマジカルなスペースをあなたも思いきりエンジョイしてほしい。



その時の感性で本を読む

工藤 英美（短期大学部 講師）

私は物心つく頃から絵本を読んでいた。私は絵本が好きだった。私の記憶に残る最初の絵本は偉人伝である。私はこの偉人伝が好きで、中でもキュリー夫人が一番好きだった。特に、夫ビエールとラジウムを発見する場面は今でも文章や挿絵が思い出せるくらい、私の心に強く残っている。5、6歳の私はその場面を読むと、いつも心が熱くなった。まるで暗闇の中に青白く光るラジウムが私にも見えるように、私は夫と妻とともにその発見の感動を体験するのだった。この偉人伝は何度もなんども繰り返し読んでいた。

やがて、私は小学生になった。私が小学生だった頃は、絵本や本は「買うもの」というより「借りるもの」だった。毎週土曜日は学校が終わると（私の時代は土曜日も午前中は授業があった）、急いで家に帰り、昼食を食べ、友だちと市民図書館へ走っていった。当時、小学生の間で大人気だった本は「かこさとし」の絵本だった。中でも一番人気だったのが「どろぼうがっ

こう」だった。しかし、この本はいつも誰かに借りられていて、私にとって幻の絵本だった。ところが、ある日「どろぼうがっこう」が図書館の書棚にあるのを見つけた。私がどれほど喜んで、早く「どろぼうがっこう」を借り、早速「どろぼうがっこう」を読み始めた。「どろぼうがっこう」はお腹がよじれるほど面白くて面白くて、二回続けて読んだことを覚えていいる。私が一番好きな場面はアリの卵を盗む場面だった。今でもその時の楽しい記憶が蘇る。ところが、大人になって「どろぼうがっこう」を買って読んでみると、小学生の頃のように笑えなかった。

中学では、心に残る本が何冊もある。私の通っていた中学校では、校内キャンペーンとして「これだけは読んでおこう」という本のリストがあり、半ば強制的にそれらの本を読まなければならなかった。けれども、その選書はとても素晴らしい。けれども、その私を夢中にさせた。中でも、武者小路実篤の「友情・愛と死」はとても印象深い本だった。本の内容からすると清々しいと表現することが適切ではないかもしれないが、当時の私はこの本を読むといつも清々しい気持ちになった。

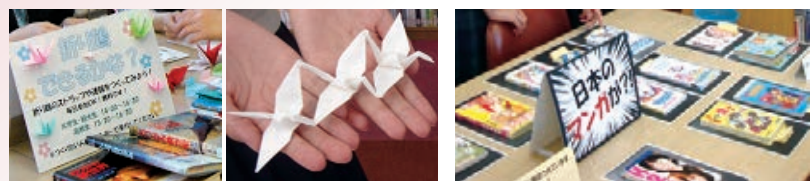
思った時期であった。その中でも、カミュの「異邦人」とミッチェルの「風と共に去りぬ」が心に強く残っている。「異邦人」は利他的な感覚が、当時の私の心にとて響いた。そして、「風と共に去りぬ」では、スカレット・オハラ生き方に憧れと共感を覚えた。ざっと私と本にまつわる話をしききたわけだが、私と本との思い出とは、本を読んだときに引き起こされる感情体験だった。もし、今これらの本を読み返したならば、私はあの頃と同じ感情を抱けるだろうか。おそらく、同じ感情を体験することはできないだろう。それは、その時々感性で本を読んでいるからだ。読者の感じ方が異なれば、本は読者に同じ感情を抱かせるとは限らない。しかし、それが本と私の大切な思い出にもなっているのだ。その思い出を楽しむのも読書の楽しみ方の一つかもしれない。

最近、職業上、本を読む機会が多い。本から新たな知識を得たり、様々な著者の考えに触発されたりして、それはそれで面白いと思っている。しかし、それは感性で本を読んでいるのではない。今は、無性に何かのためではなく、ただ純粋に物語を楽しむ世界に浸りたいと思っている。その時でしか味わえない本との出会いがあると知っているから。

図書館フェア 2017

今年も七夕飾りやテーマ展示、参加型企画を行いました。“折り鶴できるかな?”のコーナーでは基本折りの鶴からストラップを作成したり、上級者向けの連鶴を折ったり、楽しく参加して図書館に親しんでもらいました。今回は教員から貴重な資料を借りて展示も行いました。

7月6日～12日開催



連鶴やストラップも作りました!

世界各国で翻訳された日本のマンガ (教員からの提供資料)

光琳かるた

江戸時代の画家尾形光琳作で、小倉百人一首の中で最も豪華で華麗な「歌かるた」といわれています。読み札に歌仙絵と上の句、取り札に花鳥風月と下の句が描かれています。裏紙は純金地で芸術性にも価値があり、期間中はキラキラと一際輝き、来館者の目を引いていました。



(教員からの提供資料)

夏目漱石生誕 150 年

1867年、夏目金之助として現在の新宿に生まれた漱石は49歳という若さでこの世を去りました。今年は生誕150年になります。『こころ』の初版本と手書き原稿を展示し、読み比べてもらいました。



おめでとう! だるまちゃん誕生 50 周年

児童文化の研究者で絵本作家の加古里子が、『だるまちゃんといっしょ』(こどものとも2月号)を発表し、今年で50年を迎えました。「だるまちゃん」シリーズをはじめ、郷土玩具や伝承遊びを題材にした数多くの作品を、手に取って楽しんでもらいました。



手作りパネルで記念写真